

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名 (姓、名)	アンドレウ マルチネズ エステル ANDREU MARTINEZ Esther	授与番号 甲 1553 号
学位の種類	博士 (文学)	授与年月日 2022年 3月 31日
学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項該当者 [学位規則第4条第1項]	
博士論文の題名	日本 SF 文学における音楽 —文学における「音」と「身体」の考察—	
審査委員	(主査) 中川成美 (立命館大学文学部特別任用教授)	巽孝之 (慶応義塾大学文学部名誉教授)
	内藤由直 (立命館大学文学部教授)	
論文内容の要旨	<p><b>【論文の構成】</b> 本論文は序論と結論、および全二部・五章で構成される。各章の概要は以下のとおりである。</p> <p><b>【論文内容の要旨】</b> 本論文は、音響文化研究及び文芸音響文化研究を基礎とする学際的な日本文学研究であり、日本 SF 文学作品における音楽を、「音」と「身体」という二つの概念に焦点に当てて分析されたものである。聴覚にまつわる現象が主体を構築、分解、不安定化させる過程に着目し、〈音〉はどのように概念化され、動物、ジェンダー、他者性、テクノロジー等ほかの諸要素とどのような関連を作り得るのかについてが検討されている。本論は二部構成で第一部「音・身体・技術」では、音をめぐるテクノロジーに着目し、文字に書き表された音を観察しながら、技術革新と同時進行する身体の捉え方の変化、そしてこの変化に伴う主観性のゆらぎについて検討する。第二部「音楽と他者」では、音による他者への接触の欲動、そして主体性と他者性の構築に焦点が当てられている。生と死という対立概念に基づいて構成され、ここで扱う作品には音楽が両概念と共に描かれている。</p> <p>第一部第一章「海野十三『十八時の音楽浴』における音楽」では、海野十三の「十八時の音楽浴」(1937年)を扱い、国民国家に帰属する身体を構成させるための道具として音楽を分析している。音楽は「振動」という物理的現象を通じて身体へと侵入し、先進的に発達した機械文明の下で身体と機械の同一化を押し進めたと分析している。第二章「デジタルの時代」では、サイバネティクスの発展と関連づけて高野史緒の『ムジカ・マキーナ』(1995年)を分析する。前章における人体が機械—肉体的労働をこなすマシーン—として概念化されていたとすれば、ここでは脳やその機能がコンピュータの一種とみなされ、人間の脳は録音音源を保管、参照するためのデータベースとして利用されている。第三章「歴史の終わりにおいての人間シミュラクラ」では、奥泉光の『ビビ・ビ・バップ』(2014年)を取り上げ、シンギュラリティの誕生とともに人間と機械の概念的境界が溶解する現象の最終形態を描き出している。ここでの音楽の探究及び身</p>	

<p>論文審査の結果の要旨</p>	<p>体は、既成物の反復と再生産という考え方に基づいており、作品が描き出す脱歴史的な社会の徴候として読むことができると考察している。第一部はテクノロジーと身体性の相互的影響関係に焦点を当てて、戦前期から現代に至る技術革新の歴史における三つの段階と、それに対応した身体概念との関連を象徴している。</p> <p>第二部第四章「動物になること、音楽になること」では、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが発展させた「生成変化」という概念から古川日出男の『MUSIC』（2010年）が分析される。ここでは、『MUSIC』における音楽が「世界における（への）存在」を示す、生命そのものの表象であることが論じられている。第五章「死の音」では、上田早夕里の「夢見る葦笛」（2009年）、飛浩隆の「デュオ」（1992年）、栗本薫の「セイレーン」（1979年）の三作品を取り上げ、主体が音楽を媒介として他者からの侵入を受ける物語として機能していることが考察されている。ここでは、他者との接触、及び〈音楽／現実世界になる〉ことが主体そのものの消失として理解されるとき、いかにして死がモチーフとして出現するのかが明らかにされる。これらの作品群における、主体性を危険に晒す音楽は、自己と他者の垣根の破壊者となり得るものであるという解釈が示されている。第二部では、生と死は二項対立的な主題ではなく、他者への接触の欲動を概念化する二つの方法として捉えられることへの解釈を中心に論じられている。</p> <p>扱った作品の分析から、人間の声、楽器、音響機器、動物、エイリアン、都市や宇宙そのものなど、いずれから作り出される音／音楽であったとしても、文学に描かれる音楽は、常に身体を前面へと持ち出す役割を果たしている。その音楽はまた、作品を、身体／主体の揺さぶり、移動、ネットワークの構築、崩壊と分離、組織化と破壊の可能性を孕んだあらゆる〈出会い〉の描写へと導いていることを多彩な文学理論の応用を経て、文学と音楽との複雑な位相の絡まりあい、壮大な構想をもって日本 SF 文学から考察した本論文は、これまでにない日本 SF 文学論となって、新しい文学研究分野を切り拓いている。</p> <p><b>【論文の特徴】</b></p> <p>日本 SF 文学を対象とする音楽と文学との関係を論じる本論文は、日本で初めて本格的にテーマとして取り上げられた研究であり、何よりその研究発想の斬新性、および多彩な文学理論、音響理論、現代思想を横断する鮮やかな研究手法は瞠目に値する論文として、今後大きな影響を日本文学研究のみならず多様な分野の研究に与えていくものと推察される。まさに人文学の脱領域的想像力をフル回転させ、その未来をも担う達成といえる。</p> <p><b>【論文の評価】</b></p> <p>これまで考えられなかった新領域を切り拓いたことが何より本論文の特徴であり、今後この独創性は継続して大きな影響力をもつものと高く評価する。論証過程も膨大な文学理論や現代思想の成果を援用して議論が展開されており、また関連する国内外の文学作品を多数踏まえて論証されているため、説得力が高く、新しい研究の誕生を強く感じさせる。序論で「SF マガジン」の 60 年以上の歴史を辿り、そのバックナンバーを徹底調査したこと、また付録として収録されている音楽を題材とする日本 SF 文学作品の作品目録、資料目録も、たいへん有用であり、文献学の側面からも優れた業績となっている。取り上げられた作品のほとんどが日本近代文学研究では看過されてきた作品であ</p>
-------------------	---

	<p>るが、このような豊饒な系譜を見出したことは、今後の研究動向に大きな影響を与えるであろうことが予測される。</p> <p>ただ、審査委員会の公開審査では第一章から二章への繋がりが年代的に飛びすぎているのではという疑義、および本論文の今後の継続についての構想への問いが出されたが、今後の研究計画を含める十分に納得できる回答を得た。それらのことが、本論文全体の価値を損なうものでないことは、言うまでもない。</p> <p>以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。</p>
<p>試験または学力確認の結果の要旨</p>	<p>本論文の公開審査は 2021 年 12 月 20 日午後 2 時から 4 時まで、立命館大学衣笠キャンパス末川記念会館第三会議室で行われた。</p> <p>審査委員会は、公開審査において本論文の主要分野である日本文学研究、日本 SF 文学史、日本近代文学研究理論、および現代思想理論、音響・音楽理論について試問し、それぞれについての十分な回答を得ることができた。また本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在籍期間中における学会誌への論文発表、関係国際学会発表などについても活躍し、十分な業績を重ねたことが質疑応答から得られた。なお、申請者はスペイン語を母語として、英語と日本語による十全たる学会発表能力を有することを付記する。それらを通じて申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。</p> <p>したがって、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づき、博士（文学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。</p>